

アリス・バセットの受難
(1)



もんしろ蝶子

「グオオオ！」

銀で出来た甲冑をつけた動物たちを見てアリスは顔を輝かせた。

「皆————！ 来てくれたの!? ありがとう————！」

アリスが駆け寄ると、パパベアが乗れと言わんばかりに体勢を低くした。アリスはそんなパパベアに飛び乗ってゴブリンが作った大剣敵を肩に担いで兵に突っ込んでいく。

「わははははははは！ 皆、好きに暴れろ！ 行くぞ、野郎ども——！ 反撃開始だ——！」
妖精、動物、鉱夫達。

次々にやってくる仲間たちに元気を取り戻したアリスが叫ぶと、どこからともなくドンの声が出た。

「ギューギュー————！！」

その声を聞いて仲間たちが空を見上げると、南の空から数十匹の色とりどりのドラゴンがこちらに向かって飛んでくるのが見える。

先頭はドンとスキピオだ。そのすぐ後ろのドラゴン達の頭の上には、今まで全く姿を見せなかったレインボー隊が、まるで竜騎士のように跨ってこちらに向かって手を振っている。

それを見てアリスは叫んだ。

「レインボー隊！ 合体だ！ 修行の成果を見せてやれー！ー！ー！」

意気揚々と叫ぶアリスの声を聞いて、レインボー隊はドラゴンから飛び降りて空中でレインボーアッシュに合体すると、驚く兵士達に殴り掛かって行く。その動きは驚くほど滑らかで、思わず仲間たちも咄然としてしまった。

そんな光景を見て、ノアが構えていた剣を下ろしてポツリと言う。

「勝った……ね」

「ええ、恐らく」

時は遡る事4年前――。

アリスは震えながら目の前で唐突に始まった、まるで寸劇のような婚約破棄現場をどこか上の空で見つめていた。

時折、今しがた婚約破棄を言い渡された目の覚めるような美女がこちらを睨んでくるが、そんな事はどうでもいい。

アリスはどうか落ち着こうと深呼吸をして辺りを見渡した。

天井には豪華なシャンデリア。床はピカピカに磨き上げられた大理石。漫画や映画で見えた事のない衣装。

異様に顔面偏差値の高い美男美女の群れ……その中心に居る一際輝く人達に、アリスは何か見覚えがある……。

その事に気付いた途端、アリスはある思考に思い至りあまりにもありえない状況にヒュッと息を飲み込んだ。

隣にアリスを庇うかのように立っているのはルーデリアの王子、ルイス・キングストン。そしてその後ろにぴったりと張り付いているのは、次期宰相カイン・ライト。そして今しがたルイスに婚約破棄を言い渡されていたのは、間違いなく悪役令嬢、キャロライン・オーグだ。

何度も何度もアリスはこの光景を見て来た。そう、携帯ゲーム機の中で！ これはアリスが大好きだったゲーム『花咲く聖女の花冠』の世界だ！

一つ思い出すと、記憶はまるでフラッシュバックのように蘇ってくる。そうだ、思い出した。死んだのだ、自分は。あの日、不慮の事故によって……。

アリスが護衛に引きずられるようにしてパーティー会場から姿を消したキャロラインを

啞然とした顔をして見ていると、ルイスが先程とは打って変わって優し気な視線をこちらに向けた。

「すまない、アリス。怖かっただろう？」

「い、いえ……そんな……」

突然の問いかけにアリスはぎこちなくルイスを見上げると、ルイスの見事な金髪と夏の空のような透き通った青い瞳が目飛び込んできた。

あまりの眩しさに目がつぶれそうである。

たどたどしく震えるアリスを見てルイスがさらに笑みを深め、愛おしそうに抱き寄せてアリスの蜂蜜色の髪にそっと口付けてきた。

「ひっ！」

背筋がゾツとして思わず後ずさったアリスを見て、ルイスは不思議そうに首を傾げた。それもそうだろう。今までアリスはルイスからのスキンシップを拒んだ事などないのだから。

前世を思い出す前のアリスは、の話だが。よりによってこのタイミングで思い出すとは、なんたる不運。

いや、結婚式などで思い出すよりは遥かにマシかもしれないが。

アリスは混乱する頭で必死に考えた。一体何がどうなっているのかさっぱり分からない。この手の話を沢山読んだが、まさか自分の身に降りかかろうとは思ってもみなかった。

（これ、ヤバくない？ このまま行ったら真っ赤な絨毯をこの男と歩く羽目になる？ いや、それ以前に色々整理したい。どうにかここから逃げ出す方法……あれしかないか……）

森の中でクマなどの猛獣に出会った時の事を想像してほしい。一番に思い出す対処法ならほぼ共通だろう。そう、死んだふりだ。

それを実行すべく、アリスは目を瞑り、膝からガクンと崩れ落ちる。その瞬間、ルイスの驚き焦った声が大広間に響き渡った。

アリスの前世の名前は佐伯琴子。享年十六歳。短い人生ではあったが、頭の中に詰め込んだ物語は数知れず。

琴子の趣味は乙女ゲーだけでは飽き足らず、少女漫画や少女小説、アニメなど多岐にわたっていた。

その中でも特に好きだったのがこのゲーム『花咲く聖女の花冠』だ。

しかし、何故。何故、神は琴子をあえてヒロインの座に転生させたのか！

失神している振りをしているアリスの眉間に思わず皺が寄った。

そんなアリスの苦悶の表情を見て、ルイスが何を誤解したのかアリスの髪をゆっくり撫でる。

「可哀相に……よほど恐ろしい夢を見ているようだ」

「みたいだねえ。まあ、散々な目に遭わされてたみたいだから仕方ないって。今日はもう、このまま学園の部屋に送ろっか」

「そうだな。目が覚めた時、自室の方がアリスも安心するだろう」

「……」

ルイスとカインの見当違いな心配をよそにアリスはまだ考えていた。

（何故、ヒロイン……モブが……モブが良かった！）

琴子は自他共に認める生粋のカップリング厨だ。

ヒロインとヒーローのカップリングがとにかく大好きで、そこに自分はいらないのだ。二人が幸せならそれでいい。そして何よりも……。

（私は、私自身は……あて馬が好きなのに！）

言い方は大変悪いが、佐伯琴子はどんな話でも大抵ヒーローより当て馬を好きになってしまうタイプだったので、この転生は本当に迷惑でしかない訳なのだが、それを今嘆いていても仕方ない。

「カイン、近々フォルス公国に顔を出す予定なんだが、その時の編成を一応お前にも頼めるか」

「俺え？　そういうのは親父がやるんじゃない？　大公の即位式だっけ？」

「ああ。突然のレンギル大公の崩御に混乱していたが、どうやらようやく後継者が決まったようだ。お前の親父のだけでは少々心配なんだ」

「シャルル……だっけ？　確かにそれは親父には無理かもね」

「だろう？　早急に警備を強化しなくては。何せ、あのシャルルが大公になるのだから……」

「ま、了解。アランと相談するよ」

「ああ、頼んだ」

「……（シャルル……私の推し……）」

恐れていた事が起こってしまったと言わんばかりのルイスの声が、どこか遠くに聞こえる。

『花咲く聖女の花冠』は通称『花冠』と呼ばれていて、先細りしかかっていた乙女ゲー界限では近年稀にみる大ヒットを飛ばし、書籍化からメディア化して次は映画化か？とまで言われていた作品だ。それほどまでに大人気作品だった訳だが、ただ一つ、重大な欠点があった。

（何故！ どうして！ シヤルルが攻略対象ではないのだ！）

『花冠』は大人気作品だけあって、続編が3まで出た。その後ファンディスク作品が2作出ている。それぞれヒロインも変わり攻略対象も変わるのだが、そのどれにもアリス最推しのシヤルル・フォルスは攻略対象としては出てこなかった。

作品自体には皆勤賞だったというのに、スチルまであったというのに、だ。さらには声まであり、詳細なキャラ設定まであったにも関わらず、隠しキャラでもなく当て馬。何故……。

他の作品にも言える事だが、琴子は当て馬が大好きだった故、もちろん例に漏れずシヤルルが推しだった。

そこまで思い出したアリスは焦った。

（ちよ、ちよ、ちよっと待って！ この流れ、真っすぐルイスエンドじゃない？ いや、無理だけど？ ルイスとか本気で無理なんだけど!!?）

「アリス？ 暑いのか？ カイン、少し馬車の窓を開けてやってくれないか？ アリスが暑いみたいだ」

「ああ」

「……」

カインが窓を開けた事で冷たい風が馬車の中に吹き込んでくる。顔にかかった髪をそつと避けてくれるのはルイスの優しい手だ。

しかし、別に暑い訳じゃない。しっとりと背中が汗ばんでいるのは、未来の事を想っての冷や汗だ。そんなアリスの心を知ってか知らずか、ルイスの愛し気な気配が頭上に近づいてくる。

「アリス、明日、父上に君との事を報告しよう」

「……」

（……詰んだ……このスチル、知ってる……）

死んだふりをして上手く卒業イベントを回避したつもりだったが、どうやらそうは間屋が卸してくれなかったようだ。

眠るアリスに、優しいキスを落としてくるルイス。あまりにも見慣れたスチルと同じ行動をするルイスに、アリス・イン・琴子の記憶が今、ありありと蘇った。

——どうやら今、『花冠』のルイスルートが終わろうとしているらしい——と。

「ルイスは……ルイスルートだけは嫌——！」

ハッと息を飲んで飛び起きたアリスは、急いで手紙でルイスとの婚約を辞退しようと机に駆け寄ってふと気づいた。

「あ、あれ？ あれ!？」

小さな自分の手を見たアリスはその手で顔をぺたぺたと触って何かに気付き、急いで鏡の中の自分を見るなり、そのまま後ろにパタリと倒れて意識を失った。

「……嬢さま、お嬢さま」

「んん？」

アリスは誰かに揺さぶられてうつすらと目を開けた。

目の前にはバセット家の執事見習いのキリがこちらを怪訝な顔で見下ろしている。

呆れたようにこちらを覗き込む彼はせいぜい十五歳かそこらだが、その顔は幼くてもハツキリとイケメンだ。さらさらストレートの黒髪と口元の黒子がこの歳で既にセクシーさを醸し出している。

(こ、ここにも攻略対象が……)

また気が遠くなりそうになるのをグツと堪え、アリスは差し伸べられた手に捕まって起き上がると、今までの失態を忘れたかのようにニカツと笑う。

「おはよ！ キリ」

「……おはよ！ じゃありません。床で白目向いて寝てるなんて、一体どんな寝相ですか」
「ご、ごめんなさい」

「早く支度してください。朝食食べてないの、お嬢様だけですよ」

「うん！ すぐ着替える！」

そう言つて手早くキリを部屋から追い出したアリスは、もう一度恐る恐る鏡を覗き込んでゴクリと唾を飲み込んだ。

「も、戻ってる……私、戻ってる！」

この餅のようなほっぺ、この小鹿のような足！　これはどう見ても子供だ！　恐怖のルイスルートは回避したのだ！　そこまで考えたアリスは重大な事に気付いた。　違う。回避したのではない。始まってすら居ないのだという事に！

「ど、ど、ど、ど」

（どういう事!?!）

言葉にならないアリスは一旦落ち着く為に大きく深呼吸をして、とりあえず琴子の記憶を忘れないようにゲームの詳細を書き留めようと机の鍵がかかった引き出しを開け、日記帳を取り出そうとして引き出しの中の違和感に気付いた。

「？」

引き出しを下から覗き込むと、歪に作りつけられた二重棚が見える。

「なんだろう？」

こんなもの、棚の中にあっただけ？　そう思いながら引き出しを引くと、中から禍々しいほど真っ黒な装丁の一冊の本が姿を現した。

恐る恐るそれに手を伸ばして本をめくるアリスの背中に冷たいものが流れ落ちていく。

「ひっ……ひいひい！」

パサリと本が足元に落ちた。真っ黒な装丁からしてロクなものではないだろうと思ってはいたが、中を見て想像以上だったと思い知る。

（こ、これは……）、攻略本？ しかも手書き……）

真っ黒な本の正体はアリスによる、アリスの為の『花冠』の攻略本だった。

しばらくそれを読んでいたアリスは、ある事に気づいた。

一つのエンドが終わるとまた始まるのだ。新しいルートが。

「で、転生してる上にループしている……!？」

急いでページをめくると、最後のページには、

『二十二回目、カインストウルーエンド完了。次に託す。最後まであがけ！ 妥協を許すな！ シヤルに辿り着け、アリス！ お前なら出来る!』

などと書かれていて、過去のアリスがどれほどまでに苦労してカインルートを攻略したのかが伺えた。こんな熱いメッセージを送るほどだ。よほど難しかったのだろう。

本を持つ手が震える。アリスが呆然とその場に立ち尽くしていると、ドンドン！ と乱暴にドアが叩かれた。キリだ。怒っている。相当怒っている。

「お嬢様！ 朝食です！ まさか十四歳にもなってドレスが一人で着られませんか!？」
「き、着られる！ 着られます！」

そのままドアを突き破ってきそうな勢いのキリに慌てて返事をしたアリスは、本を二重棚に仕舞い込んでしっかりと鍵をかけ、急いで着替えた。廊下に飛び出すとキリが目を吊り上げてこちらを睨んでくる。

「ご、ごめんなさい」

「全く、今日はどうしたんです？ 白目向いて床で寝てるわ、ドレスは着れないわ、髪はボサボサだわ、散々ですよ」

「はい、ごめんなさい……」

「俺に謝られてもね！ 困るんですよ！」

「仰る通りです……」

「後でしっかりハンナとロイに謝っておいてくださいね！」

それだけ言ってキリはさっさと歩き去ってしまった。

ちなみにハンナとは、この家の唯一のメイドでロイはコックだ。後は庭番のジョージである。

最低限の使用人しか居ないのは、ここが辺境にあるちつぽけな男爵家だから。

当主でありアリスの父、アーサーはお人よしが過ぎてすぐに人に騙されてしまう。そんなだからいつまで経ってもバセット家は貧乏なままだった。そんな父に呆れて母はアリスと兄のノアを置いて家を出て行ってしまった。アリスが2歳の時だ。

それでもアリスが擦れる事なく素直に（少々お花畑に）育ったのは、偏に家族や使用人達、領地の人達の惜しみない愛情のおかげだろう。皆にはいくら感謝しても足りない。

アリスは一旦さっきの本の事やループの事などもすっかり忘れてルンルンと廊下をスキップしていた。

「ごっはんごっはん」

腹が減っては戦など出来ないのだ！ 育ち盛りのアリスにとって重要なのは、何よりも食事である。

早々に食事を終えたアリスは、部屋に戻りまたあの本を取り出した。

（読みたくないなあめくりたくないなあ）

そうは思っても読まねばなるまい。せつかく先人のアリスが残してくれた攻略本だ。

嫌々ながら人差し指と親指で抓むようにページをめくると、一回目のループについての攻略が書かれていた。

いや、この時点ではまだループだという事も知らぬまま、誰ともくつつかない、いわゆる大団円エンドを迎えている。これはノーマルエンドだ。どうにか誰かとのトゥルーエンドを迎えようとしたようだが、八方美人が過ぎて誰ともトゥルーエンドを迎えられなかったらしい。

（乙ゲー初心者か！）

思わず心の中で突っ込んだアリスは、そのまま二回目の攻略に目を通した。

二回目はどうやらこの本を見つけて早々にループしている事に気付いたようで、果敢にも真っ先に隠しキャラであるキリに挑戦している。

その後も何度もループを繰り返し、『花冠1』ヒロインアリスの全てのエンドをクリアしていた。

「おかしい……よね、これ……」

アリスの手はまだ震えている。読み進める内にどんどん恐ろしくなってくる。

全てクリアしているにも関わらず本は終わらず何故かその後もループは続き、それ以降のエンドは攻略対象は増えないものの、本家のゲームには無かったはずのアリス断罪エンドや、処刑エンドまであった。とてもここでは言えないようなエグいエンドである。

どうやらそれには他のアリス（ややこしいので以降は過去アリスと呼ぶ）も気づいたようで、正規エンドを全て終えたにも関わらずループしている事に気付いた過去アリスのページは、絶叫から始まっていた。

全て読み終えたアリスは、紙を取り出して気付いた事をまとめていく。

「ずっとループしてる。しかも記憶を思い出す時期は皆バラバラ……。前回の私が『花冠』を思い出したのはキャロライン様断罪イベントの真っ最中で、何も書けてない。その前はフォースタースクールに入学した時でカインエンド……。これはどういう事？」

その他にも不思議な事がある。どの過去アリスも、肝心のシャルルに会えていないのだ。

『花冠』一番の推しだと言うのに！　なんたる不幸！　なんたる不運！

ゲームのシャルルの登場シーンはゲーム中盤辺り、魔法の授業でアリスのクラスはフォース公国に向かう事になる。ここでシャルルはこの世界では珍しい白の魔法を使うアリスに気付き興味を持つ、というものだったのだが、どのループを見ても過去アリスはそのルートを辿っていない。

なので、過去アリスが白魔法を使う事を誰も知らない状態でエンディングを迎えていたのだ。

それはつまり、この『花冠』には聖女が誕生しないという事になる。聖女が誕生しないにも関わらず、過去アリス達が全てのエンディングを迎えているのは、一体どういう事なのだ？

「ううううううわかんない！」

途端にお腹がグウと鳴った。アリスは男爵令嬢とは思えない程食い意地が張っている。言い方を変えれば、アリスは非常には燃費が悪いのだ。

本を一旦机に戻して意気揚々と庭に出ると、ジョージが今日も汗を流しながら庭仕事をしていた。

「ジョージ、おはよう」

「ん？ お嬢、おはようございます。今日は何採りにきたんですか？」

ニヤリと意地悪な笑みを浮かべたジョージはアリスにハサミを手渡してくれる。

「トマトとキュウリ採ってもいい？」

「構いませんよ。でもあんまり採りすぎないでくださいよ？ またロイに怒られるから」

「はい！」
アリスはハサミを持ってジョージの育てる家庭菜園をグルリと見て周って真っ赤に熟れたトマトとピカピカツヤツヤのキュウリを二本採ると、そのまま屋敷の裏に流れる小川に

向かう。

アリスは川に石垣を作ってそこに野菜をつけると、自分も靴を脱いで足を川に浸した。

「つめた〜い！ 天国〜」

まだ初夏とは言え暑い。足を川につけたままゴロリと寝転んで目を閉じると、サワサワと風が木々を揺らす音や小鳥達の囁き声、虫の大合唱が聞こえてくる。

「夏とは言え、こんな所で寝ていたら風邪引きますよ」

どこかで聞いた事のあるような声にアリスがハッと目を開けると、見事な銀の髪と月のような金色の瞳の少年が視界に飛び込んできた。

「シャ、シャルル!?」

まさかの推しの姿にアリスが勢いよく起き上がると、シャルルは驚いたように目をぱちくりさせている。

（何で!? ずっと、ずっと会えなかったのに!）

さっき読んだばかりの過去アリスの苦労を思い出して思わず涙ぐんだアリスを見て、シャルルは柔らかい笑みを浮かべた。

「私、どこかであなたに会いましたか?」

丁寧だけれど威圧感のあるシャルルの言葉にアリスはしまった! と頬を引きつらせる。

「えっと、あの……」

どう言い訳しても怪しい気がしてオロオロするアリスを見て、シャルルは声を出して笑う。

「冗談ですよ、アリス。あなたアリスでしょう？　蜂蜜色の髪に緑の瞳。うん、ノアに聞いていた通り」

「兄さまに？」

「ええ。フォスタースクールが今日から夏休みなので、ノアに誘われたんです。良かったら遊びに来ないか？　って。それを聞いていたんでしょう？」

「そ、そう！　兄さまからの手紙で、あなたの事聞いてて、それで……」

とんだ嘘っぱちである。思わぬ所からの助け船に瞬時に乗り込んだアリスは、引きつった笑みをシャルルに向けた。そんなアリスを見てシャルルは口の端だけを上げて意味深に微笑むと、アリスに向かって手を差し出してくる。

恐る恐るシャルルの手に自分の手を重ねると、グツと掴まれてそのまま引つ張り上げられた。

「ひやあ！」

「ふふ、すみません。で、ここで何をしていたんですか？　アリスは」

驚いて目を丸くしたアリスにシャルルが問いかけてくる。

けれどアリスの脳内はそれどころではない。長年夢にまで見た推しが今！　目の前にいるのだから！

そんないかにも挙動不審なアリスに流石のシャルルも不審に思ったようで、突然アリスの目の前で指をパチンと鳴らした。その途端、アリスはハッと我に返る。

「目が覚めました？」

「は、はい。ご、ごめんなさい」

「じゃあもう一度。ここで何をしていたんですか？」

一言一言、何かを確認するかのようなシャルルの言葉に、アリスは首を傾げて川に視線を落とした。そこにはさっき採ったトマトとキュウリがプカプカ浮いている。

「こ、これ！　これを冷やしてたんです！　そうだ！　シャルルも食べる？」

「ここで？　食べるんですか？」

「うん！　うちの野菜、美味しいんだよ！　半分こしよ！」

アリスは川に手をつ突っ込んでトマトとキュウリを取ると、キュウリを一本シャルルに手渡した。トマトはどうしようか考えていると、シャルルがポケットから折り畳み式のナイ

フを取り出す。

「貸してください。私が切ります」

「うん、ありがとう」

言われるがままトマトを差し出したアリスは、怖いぐらいの平常心に自分自身が一番驚いた。さつきはあれほど荒れ狂った波のようだった心が、今は穏やかな波のようだ。

綺麗に二つになったトマトを半分受け取り、河原の石にシャルルと並んで腰かけて片手にキュウリ、もう片手にトマトを持って大きな声で挨拶をする。

「いったきまうす！」

もはや食い意地の権化である。そんなアリスの様子にシャルルは不思議そうに首を傾げた。

「イタダキマス？」

「うん！ ご飯食べる時の挨拶だよ！」

「へえ……」

ポツリと呟いたシャルルの声は目の前のトマトとキュウリに夢中のアリスには届かなかった。

二人で並んで食べた野菜は最高に美味しかったけれど、果汁たっぷりのジュシーなトマトはアリスのドレスを汚すのに一役かってくれた。ついでにアリスの顔も。

「アリス、トマトで口元が汚れてますよ」

「へ？」

キョトンとするアリスの口をシャルルが笑いを堪えながら丁寧に拭いてくれた。あまりにも一瞬の事にアリスは驚きすぎて呼吸が一瞬止まりそうになる。

ゲームではシャルルはハンカチをアリスに手渡してそのまま立ち去ってしまうが、目の前にいる推しはハンカチであろうことかアリスの口を拭いたのだ！

これが興奮せずにいられるか!? 答えは否！

思い切りニヤけるアリスを見てシャルルがまた目の前で指をパチンと鳴らした。

「はっ！ 私、一体何を……？」

我に返ったアリスが隣のシャルルを見ると、シャルルは申し訳なさそうな笑みを浮かべた。

「すみません。私はまだ自分の魔法が制御出来ないみたいなんです」

「魔法？」

「ええ。魅了、という魔法なんです、聞いた事ありませんか？」

「魅了！ 知ってる！ ぽわわくんってなっちやう奴だよね!？」

「ぽわ？ ええ、多分そうです」

「凄いね！ 魔法使えるのかっこいい！」

「かっこいい……ですか？」

「うん！ 私、何にも使えないもん」

言ってからふと思う。あれ？ アリスは確か白魔法が使えるはずだ。それなのに口は勝手に魔法を使えないと言う。

アリスの答えにシャルルは優しく微笑んで唐突にアリスの頭を撫でてくれた。

「いずれあなたにもきつと、魔法が使えるようになりますよ。あなたの体の中には素敵な魔力が流れているので」

「ほんと？」

「ええ。きつと」

あまりにも優しい笑みに先程の小さな違和感はすぐに消え去ってしまう。心穏やかとは言え推しは推し。アリス・イン・琴子はまさにシャルルの魅了にすっかり堕ちていた。

楽しい時間というのは過ぎる時はあつという間だ。今日、この事を部屋に戻ったらすっかり書き記さなければなるまい。過去アリスの為にも！

「そろそろ戻る？」

「そうですね。ノアも待っているでしょうし、アリスもノアに会うのは久しぶりでしょう？」「うん！」

大好きな兄に会うのは半年ぶりだ。アリスはシャルルに手を引かれて立ち上がった。子供のシャルルの視線はまだアリスと変わらない。

ふ、とシャルルの金色の目が細められた。薄く笑った口元は、とてもさつきまでのシャルルとは思えないほど酷薄だ。

「……シャルル？」

どうしてそんな顔をするのか尋ねようとしたアリスの目を塞ぐようにシャルルが手の平で覆ってきた。同時に耳元で囁くようなシャルルの声。

「ダメですよ、アリス。好奇心は猫を殺す、ですよ」

「なんでそんな言葉……今……？」

そこでアリスの記憶は途切れた。

「シャルル!!?　へあ?　ゆ、夢?」

気づけばアリスは自室のベッドに居た。さっきまでは何だったんだろう?　そうだ、書かねば!　…何を?

「あれ?　あれ?」

何かがすつぽり抜け落ちている。そんな気がするのに何も思い出せない。おかしいな?　アリスが机の前でぼんやりしていると、コンコン、とノックの音がした。次いでドアを開く音に振り返ると、そこには半年ぶりに会う兄のノアが立っている。

「アリス!　ただいま!」

「兄さま!　お帰りなさい!」

久しぶりに会う兄は背が伸びて少しだけ顔つきが大人びていた。笑顔が大変美しい。アリスと同じ癖っ毛で蜂蜜色の髪にアリスよりも濃い緑の瞳。ノアもまた立派な美青年である。

アリスはノアに駆け寄ると真正面から飛びついた。ノアはそんなアリスを軽々抱き上げると、その場でグルグル回りだす。

「アリス、少し重くなった?」

「ひどい！ 兄さまの意地悪！」

「はは！ 嘘だよ。僕のアリスはいつも羽根のように軽い」

「へへ！」

あはは、うふふ、と笑いあう兄妹を白い目で見守っているのはキリだ。そんな視線を物ともせずノアはアリスの頬に口付けると、ようやく下ろしてくれた。

「アリスにフォスターパークでお土産を買ってきたよ。君に似合うといいんだけど」

「嬉しい！ 見たい！」

「はい、これ。お守りの石がついた髪飾り」

「ありがとう！ 兄さま！」

手の平に乗せられたのは綺麗な緑色の石がついた髪飾りだった。アリスは早速それを髪につけるとクルリと回る。

「似合う？」

「うん、似合う似合う」

「キリは？」

「ええ、まあ、いいんじゃないですか？」

どうせ何つけても似合うって言うんだろ？ とでも言いたげな視線をノアに向けながら

キリは適当に返事をしたが、この兄妹はそんな事など気にしない。

一応言っておくと、決して馬鹿にしている訳ではない。これはこの兄妹の長所だとキリは思っている。

「そう言えば兄さま、シャルル様は？」

ふと思ひ出したのはシャルルのセリフ。ノアに誘われて遊びに来たのだと言っていたはずだ。何故急にそんな事を思ひ出したのか、アリスにも分からない。気づけばそんなセリフが口をついていた。

唐突なアリスの言葉にノアもキリも首を傾げる。

「シャルルって……シャルル・フォルスの事？」

「そうだよ！ 兄さま、ここに誘ったんだよね？ シャルル様と友達だなんて全然知らなかった！」

「ん？」

「ん？」

ノアが誘ったとシャルルは言っていた。それはいつ？

アリスは自分の記憶が混乱している事に気付いて焦った。何がどうなっているのだ？

顔色をめまぐるしく変えるアリスに、ノアもキリも不思議そうな顔をしている。

「とりあえず、お茶にしましょうか」

「うん。アリス、そこに座って」

「あ、うん」

ソファに腰を下ろしたアリスはまだ不思議な顔をしてノアを見つめた。ノアもじっとアリスを見つめている。先に口を開いたのはノアだった。

「先に言っておくと、シャルル・フォルスはスクールには居ないよ」

「えっ!？」

どういう事だ？ では、あれは夢？ 夢にしてはしっかり覚えているし、ドレスに飛び散ったトマトの汁が何よりの証拠だ。

いや、もしかしたら一人で食べたかもしれない。何せ燃費の悪いアリスなのだから。ではやはり、あれは全てアリスの見た都合の良い夢？

そこへキリがお茶とお菓子を持って戻ってきた。お茶の準備を終えたキリは、思い出したようにポケットから何かを取り出して机の上に置いた。

「そう言えばお嬢様、いつも言ってますが、こんなものを持ち歩くのは感心しませんね」

「え……？」

机の上に置かれているのは、間違いなくさつき見たシャルルの折り畳みナイフだ。

アリスがそれに飛びついて触れた瞬間、曖昧だった記憶がブワッと鮮明に蘇る。

「こ、これ！ シャルル様の！ さつき居たの！ 川に！ トマトとキュウリ食べて、好奇心は猫を殺すって！」

思い出した事を忘れないように脈絡のない話をするアリスを見て、ノアはそつとアリスのおでこに手を当ててくる。

「ね、熱なんてないもん！」

「そうは言っても……ごめん、アリス。意味が分からない。順を追って話してくれる？」

「う、うん」

アリスは曖昧に頷いた。話してもいいのだろうか？ どこまで？ いっそ全て話す？ ああ、あの黒い本を読む限り、過去アリスはどうやら誰の手も借りずにひたすらこのループから抜け出すためにだけにゲームを進行しようとしていたようだったが、何度やってもいつもエンドを迎えると過去に戻っていた。

その先が、未来が無いのだ。まるで狐に化かされたかのように同じところをグルグル回

っていた。過去アリスもそれには気付いたようだが、ループの具体的な解決策を見いだせないまま、エンドを迎える事しかできなかったようだった。

しかし、今回のアリスは一味違う。ニューアリスだ！ シャルルにも会えた！ そして何よりも今、味方を作ろうとしている！ まあ、道連れとも言えるのだが。

（よし、言っちゃおう）

実に短絡的にあっさりとノアとキリに話すことを決めたアリス。

何せアリスは難しい事を考えるのに適していないのだ。そんな事をしたら、ただでさえ悪い燃費がさらに悪くなってしまう。そして苦手な事をした結果は既にあの真つ黒な本に出ている。あれは攻略本ではなく、0点の答案用紙なのだ。

アリスはキリの淹れてくれたお茶をすすると、大きく息を吸い込んだ。

「あのね兄さま、キリ、私、実はこの世界の人間ではないの」

「……」

「……」

「本当の私はね、地球っていう星の日本っていう国に居たの。名前は佐伯琴子。十六歳で不慮の事故で死んだみたいで、気づいたらここに居たの」

「……」

「……それで？」

「えっとね！」

一応返事を返してくれたノアに調子に乗ったアリスは、この世界が自身がやっていたゲームに酷似している事、そのゲームの大まかな内容、ループの事、そしてシャルルの事を全て洗いざらい話した。もちろんさっきの話もだ。

全て話し終えるとそれまで冷たい眼差しで聞いていたキリが、何を思ったのか突然アリスの頭を平手で打った。

「いだい！」

「キ、キリ!？」

「目が覚めましたか？ お嬢様」

「……」

冷え冷えとしたキリの視線が怖い。アリスはブルブル震えながらノアに抱き着くと、ノアは優しくアリスを抱きしめて言った。

「アリス、父さんに言って評判のいい医者を探してくるよ。ゆっくり治療しよう。大丈夫

だよ」

「……」

ここでアリスはようやく気付いた。こんな話を、誰がまともに取り合ってくれるというのか。頭がおかしいと思われても仕方のない事だ。

しかも突然この世界がゲームの世界なのだった所で、お前はヒロインの攻略対象なのだった所で、誰が信じてくれると言うのだろう。むしろこんな話を聞いて怒りださなかつたノアは素晴らしい人格者だ。誰だつて突然そんな事を言われたら良い気はしない。遠慮なくアリスを打ったキリの反応が正しいのだ。主従という意味では大間違いだ。が。「アリス、君の言うゲームというのがそもそも何かよく分からないんだけど、突然そんな話をされても信じられないよ。それは分かるよね？」

「……うん」

反省したアリスはショボンと項垂れると、ノアの服を握りしめた。

「君がその、琴子、という少女の記憶があると言うのなら、そうなのかもしれない。でも、それだけでは信じようもないよ」

「……」

（そうだよ。当然だ。どうしてそこに思い至らなかつたんだろう……何か証拠になりそうなものでもあればいいんだけど、そんな物……はっ！ 答案用紙！）

「じゃ、じゃあこれを見て、兄さま」

「うん？」

「これなんだけど……」

アリスは立ち上がった引き出しから黒い本を取り出すと、それをノアに手渡した。

「これは？」

「これは過去の私、過去アリスが書き残した本だよ。何故かこれだけが引き出しの中に残ってたの」

本を受け取ったノアは中をパラパラと捲りだした。それを見ていたキリはまだ冷たい目でアリスを見ている。

「日記など、いくらでも捏造できますけどね」

「もう！ どうしてキリはそんな事言うのよ！」

「私は攻略対象らしいですから？ お嬢様にそのように思われていたなんて、大変光栄で

「……」

（コイツ、全然光栄だなんて思っていないわ。むしろ、くそくらえだ、ぐらいに思ってたそう……）

しばらくアリスとキリはその場で睨みあっていたのだが、不意にノアが顔を上げた。

「キリ、どうやら捏造ではなさそうだよ」

「？」

「アリス、フォースタースクールについて随分詳しいね？」

「へ？」

「屋上に出る窓の仕掛けなんて、誰かに教えてもらわないと知らないはずなんだ。ついでに言うと、屋上は立ち入り禁止だからこの手はもう使っちゃ駄目だよ？」

そう言っただけでキリに本を手渡したノアの顔は、さっきまでのアリスを憐れむような表情はすっかり消えていて真剣そのものだ。

キリもキリで手渡された本をペラペラと捲っていたかと思うと、突然顔を真っ赤にしてこちらを睨んできた。

「ど、どうしてお嬢様が俺の趣味知って……っ！」

「ああ、レース編みの件？」

「わああああ！」

慌ててアリスの口を塞いだキリは、見た事もないぐらい顔を真っ赤にしている。

キリが落とした本を拾ったノアはしばらく中身を読んでいたが、ふとアリスを泣き出しそうな顔で見つめてきた。

「アリス……ねえ、ずっとここに居たの？ これからも……？」

「わからない……そう……なのかもしれない……」

「……そう」

「……兄さま」

ノアはそれだけ言ってアリスを抱き寄せた。アリスを抱く指先が少しだけ震えている。小さい頃からノアはいつもアリスを守ってくれていた。大切に大好きな兄だ。

近所の子にいじめられた時も母が出て行った時も本当は自分も泣きたいだろうに、いつも寂しい、ママに会いたいと泣きじゃくるアリスを慰めてくれていた。二人で手を繋いで母が帰って来ないか、何時間も外で待っていた事は一度や二度ではない。

今までは単純にシャルルを攻略するまでは！　なんて考えていた。

でも、違うのかもしれない。このループを抜けなければ皆にも未来が無いのだとしたら？　たまたまアリスしか覚えていないだけで、アリスがループするたびに皆も戻ってしまっているのだとしたら？

（そっか……私に未来が無いって事は、兄さまにも皆にも未来が無いかもしれないって事なんだ……そんなのは……すごく、嫌だな）

自分だけならいいとは言わないが、大好きな兄達までループしているかもしれないと思うと、急に胸が締め付けられたように苦しくなる。

二人して俯いて暗い雰囲気になっているのを感じ取ったのか、キリが手をパンと叩いた。「とりあえずまとめましょう。お嬢様に付き合っていつまでもこの時間に留められるのは、俺としても不本意です」

「……キリ？」

「だって、そうでしょう？　これを読む限りだと戻っているのはお嬢様だけではないのではないのでしょうか？」

「僕もそう思う。恐らく、時間そのものが巻き戻っているんじゃないかな。僕たちにその

記憶はないけれど」

「……信じてくれるの？」

「行った事も無いはずの場所や会った事もないはずの人物に詳しくすぎるからね」

「信じる他ないでしょう？ 誰にも、誰にも秘密だったのにつ……」

顔を顰めたキリは、下唇を噛みしめて心底悔しそうだ。

「そうと決まれば、この本をちゃんと読んで重要な事を書き出していこう。いいね？ アリス」

「うん！」

それから、キリがお菓子とお茶のおかわりを持ってきてくれて、三人の秘密会議が始まった。

「まず質問なんだけど、今回のアリスはいつ自分が琴子だと気付いたの？」

「今朝だよ」

「今朝？」

「うん」

自信満々に頷いたアリスを見てノアは不安そうにキリに視線を送った。

「無駄ですよ。お嬢様はこんな事を黙ってられる訳ありません。そこはアーサー様にそっくりです」

「うん、そうみたいだ」

どうやら今朝起こった出来事をすぐにゲロしてしまったアリスを見て、ノアは不安になったようだ。自分だけで解決出来そうにない事はすぐに人を頼るアリスである。基本的にアリスはいつだって他力本願なのだ。

「でも不思議だね。過去アリスはずっと自力でどうにかしようとしてたみたいんだけど」「それなんですよ。よく黙ってられましたね？ お嬢様」

「わ、私だけじゃないからそれは分かんないよ！ でも……」

「でも？」

何か違和感があるのだ。本の中の過去アリスと、ここに居るニューアリス。何かが違う。「何ていうか、あんまり攻略しなきゃって思わないの。だからこの本見てもへえって思うだけっていうか……シャルルに会えたのも最初は推し！ って思ったんだけど……」

実際に夢の中のルイスルートを進行していた過去アリスは、脳内でも饒舌に『花冠』を語っていた。シャルルについても、だ。それは他の過去アリスもそうで、本を読む限り

文章の端々にシャルルへの愛が溢れている。

けれど、それを読んだニューアリスの感想はと言えば、頑張ったんだなあ〜ぐらいにしか思わない。

それよりも切実に思うのは、どうにかしてこのループを終わらせなければいけないという事だった。その為にアリスは兄たちに相談した。どう考えてもアリスだけでは無理だろうから。

「なるほど。こちらの世界にアリスが馴染んできたのかもしれないね」

「私が…馴染んできた？」

「琴子、という少女の記憶が薄れてきているのではないですか？」

「そ、そうなのかな？」

キリの言ったように琴子の時の事を忘れているのだろうか？ 少し思い出してみたが、そうでもない気がする。『花冠』のストーリーはやりこんだだけあって細部まで思い出せるし、ゲーム以外の事も…ん？

そこまで考えてアリスはふと思った。琴子は十六歳で死んだ。好きなものは乙ゲー、少女小説に漫画、アニメも好き。ノーマル厨で当て馬好き。んん？

「どうかした？ アリス」

「う？ うん。キリの言う通りなのかも。琴子の事、忘れてきてるのかも」

「忘れてるの？ 本当に？」

「うん……名前と顔と趣味は思い出せるんだけど、他の事があんまり……」

部屋の間取り……は、かろうじて思い出せる。ベッドの位置も机の場所も。でも小物は無理だ。お母さんの声は覚えてるのに、顔が思い出せない。学校までの通学路、一部は思い出せるけど、詳しい道順が分からない。

それをノアに伝えると、ノアは深く頷いた。

「やっぱりこちらの世界にアリスが馴染んできているのかもしれないね。だとしたら、急がないと」

「急ぐ？」

「そうだよ。もしもアリスまで完全にこの世界に馴染んでしまったら、誰がループに気付くのか？」

「はっ！ そっか！」

「じゃ、始めようか」

「うん！」

本を広げて一回目、二回目、とアリスが読み上げていく。それを時系列にノアがまとめた。

途中で気分の悪いエンドもいくつか出て来て、ノアの手が何度も止まった。特にアリスが断罪されて断頭台に上る事になったエンドの時には、ノアの顔色は真っ青でペンを持つ手は震えていた。

キリも顔を顰めてそれを聞いていたが、すぐにふにやけたアリスの顔を見てホッと胸を撫でおろしている。どこまでも失礼な執事だ。

ようやく最後のループを読み終えた時、ノアが大きなため息を落とす。

「よくぞここまで、だね。これが全部その、ゲームとやらのエンディングなの？」

「ううん。実はね、ゲームのエンドは本当はこんなに無いの。だから私もビックリしてるし、過去アリスも驚いてたんだと思う」

特に断罪アリスの動揺は凄かった。どこで書いたのか分からなかったが、血文字で書かれていた後半のページは、もう気が狂っていたのかもしれない。そう思える程、支離滅裂で何を書いているのか分からなかった。

「そうなんだ。何回も出て来たエンドは？」

「それはゲームのと同じだよ。大体一回しか出てきてないエンディングは私も知らないエンディング」

「なるほど。じゃあ整理しようか。アリス、攻略対象というのはこの人達でいい？」

そう言ってノアは書き記したノートを見せてくれた。そこには線の細い綺麗な字で攻略対象達の名前が書き連ねてある。

「うん。あ、隠しキャラでキリだよ」

「分かった。キ、リ、と」

「止めて下さい！　そこに俺の名前並べるのは！　不敬罪で処刑されそうです！」

さっきまで真面目に執事をしていたキリだったが、ノアが名前を書き入れた途端真っ青になった。確かに、このメンバーにいくら字とは言え並びたくはない。

「こうして見ると、実に錚々たるメンバーだね。で、この本によく出てくる推しというのは？」

推しの意味が分からないノアはアリスに尋ねてくる。

「推しって言うのは、一番好きなキヤラクター……人って意味だよ。でも私の好きな人は攻略対象じゃなかったんだ」

「……へえ？」

推しの説明をするアリスを見るノアの目が一瞬冷えた気がしたが、次の瞬間にはすぐにいつもの優しいノアの顔に戻る。

「それがシャルル・フォルスだった訳だ？」

「えっ！　なんで分かったの!？」

アリスは本気で驚いたけれど、よくよく考えればあれだけ黒い本にシャルルの名前が出てくればそりゃ誰でも気づくだろう。隣からキリの呆れたような視線がバシバシ飛んでくる。

「ま、まあでもほら、どの過去アリスも結局シャルルには会えなかった訳で！」

「でも、さつき会ったんでしょ？」

「う……そ、そうだけど」

ノアの冷たい視線から逃れるようにキリを見てみたが、キリの視線も冷たくて結局アリスは俯く事しか出来なかった。

「でもよく考えたら、それも変な話ですよ。どうして今回に限ってシャルルは突然お嬢様の前に姿を現したんでしょう？」

「そうだね。これはそのゲームとやらの流れもまとめた方が良さそうだね。アリス、教えてくれる？」

「うん」

『花冠』のメイנסトーリーは至って単純だ。というか、王道だ。

貧しい男爵家の娘アリス・バセットは、十五歳の誕生日に国民の義務である魔法適正審査を受けに登城する。そこで白魔法の加護がある事を知ったアリスは、異例中の異例でフオスタースクールに編入することになった。そこで魔法の勉強をしながら様々な試練を乗り越えていく。そしていつしか聖女と呼ばれるようになったアリスは、強大な敵に立ち向かう事を決意する！

そこまで一息に説明したアリスの隣で頷きながらペンを走らせていたノアがふと顔を上げた。

「で、強大な敵って？」

「それは『花冠2』に続く！」

「えっ、一つじゃないんですか？」

「うん。シリーズで3まで出てたよ。ファンディスクはストーリーがあってないようなものだったから、実際のメインのお話は3で終わり」

「い、一応、3まで教えてくれる？」

「うん」

『花冠2』のヒロインはエマだ。エマはアリスの二年後輩になる。その頃のアリスは聖女として既に世界を救う事に奮闘していたので、ほとんどストーリーには絡んでこない。

「待つて！ え？ ヒロインが変わるの？」

「うん。攻略対象も変わるよ」

「ええ？」

「……これ以上に攻略対象が増えるんですか？」

「うん！」

元気に頷いたアリスと反して、二人はうんざりしたような顔をしている。

「そっか。とりあえずアリスが絡む話は2には出てこないの？」

「うーん……ストーリーの端々にちよつとだけ出て来るぐらいかな……国で起こる飢饉を救ったーだとか、東の洪水を堰き止めたーとか、そういうの」

「……飢饉？ 洪水？」

「うん。エマが二年生になった頃かな？ 西の国の王子さまが助けを求めに来るの。で、

作物の出来が悪い事にエマは気付いていたんだけど、どうしようもなく西の王子に何もできなくてごめんなさい、私の力が足りないばかりに、みたいな事言つて王子ルートに入るんだけど」

「ちよろいですねえ、西の王子」

呆れたキリは既に執事の仕事を放棄して自分も座つてお茶を飲みだした。こんな執事見習いで本当にいいのだろうか。

ノアはペンを取ると何故かまた黒い本をめくりだした。

「兄さま？」

「うん。もしかしたら、その飢饉や洪水みたいな事がアリスの時にも起こっていないかなつて思つて。アリスは何か思い出す事はない？ 話には直接関係なくても、大きな規模の災害とかそういうもの」

「うーん？」

アリスは考えた。お花畑な脳みそをフル回転させて。

大きな規模の災害……火事とか？ そういうのは無かった気がする。でもそう言えば、夢で見たルイスルートの最後にルイスは何か気になる事を言っていなかっただろうか？

「兄さま、そう言えばすっかり言い忘れてただけで、前回のアリスの記憶はキャロライン様の断罪の時に蘇ったの。だから本には何も書かれてないんだけど、内容は今朝夢で見たんだ。私、どうやらルイスルートが死ぬほど嫌で死んだふりしてルイス様とカイン様のお話を盗み聞きしてたんだけど」

「盗み聞き？ それは感心しないね」

「う、ご、ごめんなさい」

シュンと項垂れたアリスを見てノアは小さく咳払いをした。

「話の腰を折ってごめん。続けて」

「うん。あのね、レンギル大公が突然崩御して、次の大公がシャルルになったって。だからルーデリアの警備を強化しなければ、ってルイス様は言ってたんだけど、これって大事な事？」

「アリス……それは聞き間違いじゃないよね？」

「うん。ちゃんと死んだふりしてたから」

ゲームの設定のシャルルは確かに3では閨落ちするが、1ではそんな事はないはずだ。ここまで考えてふとある事に気付く。

「兄さま！ ゲームではシャルルは既に大公になつてゐるの！ これって、変だよね！」

思い出した。『花冠』の攻略本には詳しいキャラクター設定が載っていたのだが、1の時には既にシャルル・フォルス大公になっていた。

「え？ ゲームの中でシャルルはいつ登場するの？」

「中盤辺りだよ。魔法の授業で私達はフォルス公国に修行に行くの。その時シャルルは既に大公として紹介されてた！」

「でもお嬢様の夢の中でルイス様は、これからシャルル様が大公になる、というような事を仰ったんですね？ それはもう殆どストーリーの終盤だったと？」

「そう！ そうなの！ 変でしょ!？」

よく気付いた、アリス！ 思わずドヤ顔を浮かべたアリスを見てキリがフンと鼻を鳴らす

この執事見習いは、もしかしくなくてもアリスをバカだと思っているな？

「…なるほど。ゲーム通りには事が運ばなかった。だから登場しなかった。もしかしたらそういう事なのかもしれないね」

「どういう意味？」

「辻褄が合わなくなるんじゃないかな。話を円滑に進めるにはシャルルはゲーム中盤で大公になってなければならなかった。それが、決まりだったから。ねえアリス。クライマックスを迎えたら、その後はどうなるの？」

「え？ その後？」

「そう。その後」

キョトンとするアリスにノアは真剣な目を向けて来る。

「その後なんてないよ？ 誰かのルートをクリアした場合はその人と婚約して、大団円エンドの場合はキャライン様が断罪されて本来の卒業パーティーが始まるだけだよ。それが終わった後はエンドロール……えっと、作った人とか声を充てた人とか、絵を描いた人の名前が流れて終わり」

それが一体どうしたのだ？ アリスはいよいよ首を傾げた。そんなアリスとは打って変わって、ノアの顔は至って真剣だ。

「なるほど。じゃあ、3が終わった後は？」

「3？ 3は闇落ちしたシャルルがドラゴンを操って世界を滅ぼそうとするの。でもシャルルって魔力が半端じゃなく強いから、1と2と3のヒロインと攻略対象が皆揃って力を

合わせて闇落ちしたシャルルとドラゴンを倒して終わり。でも、それは誰のルートも選ばなかった場合だよ。誰かのルートを選んだらシャルルは闇落ちしないどころか、出て来ないんだもん。私は推しのシャルル見る為にそのルート何回もやっただけだね！」

スペアリブのような胸をドンと叩いたアリスは、フンと鼻息を荒くした。そんなアリスを二人はまるでおかしな者でも見るような目をしている。

「ごめん全然関係ないんだけど、アリスなんでそんな奴が推しなの？ 僕には本気で分からないんだけど……」

「失礼を承知で言いますが、お嬢様、頭大丈夫ですか？ 趣味悪いにも程がありません？」

「ほんっきで失礼ね！ ちょっと闇がある方がミステリアスでいいでしょ!!」

「いや、ただのミステリアスでは世界を滅ぼそうとは思わないじゃ……ごめん、話を戻そうか。それで、シャルルとドラゴンを倒したらどうなるの？」

「うん。空を覆っていた黒い霧が晴れて、世界に平和が戻って終わり」

「その後は？」

「ない！」

「……そう」

顔を顰めたノアはまたノートにペンを走らせた。そんなノアを見てると心底思う。やっぱりさっさとノアとキリに話しておいて良かった、と。こんな事アリス一人では絶対に思いつかないし考えつかない。

変だな。どうして過去アリスはループに気付いてからも一人でどうにかしようと考えたのだろう？ 過去アリスが残したものはこの本しか無いので、過去アリスの想いを今のアリスが推し測る事は出来ない訳だが、それにしたって……。

「お嬢様、他には何か思い出せる事はないんですか？ ゲームの中で起こった事でも攻略対象に関する事でもいいので、この際全部吐いて楽になった方が身のためですよ」

まるでアリスを犯罪者か何かのように問い詰めるキリに、それまで真剣に考え込んでいたノアがおかしそうに笑った。

「キリ、その言い方は流石にアリスが可哀相だよ。それに、アリスだって巻き込まれてるだけで、別にアリスが自らループを起こしてる訳じゃないんだから」

「そうですか？ お嬢様の事ですから、案外シャルル様に言い寄りたいが為に無理やり深層心理的なものでどうにかしたとかでは？」

「……」

まったく酷い言われ様である。アリスはキリをキツと睨むと、フンとそっぽを向いた。「深層心理だけでどうにか出来るなら、僕にだって変えたい過去の一つや二つはあるし、皆の願いを叶えていたら、それこそたったの一秒も時間は進まないと思うよ？」

「そうだそうだー！」

（私は被害者だー！）

ノアの後ろに隠れて拳を振り上げたアリスを庇うようにノアが頭をヨシヨシと撫でてくれる。

「まあそうですよね。申し訳ありません。言ってみただけです」

あっさりと自分の間違いを認めたキリは、自身でお茶を淹れて優雅に飲んでいる。

「待って！　じゃあなんでわざわざ突っかつたの!？」

何だか腑に落ちないアリスを見てキリが鼻で笑った。そうだ。キリはこういう奴だ。自分が攻略対象だと言われた事と、趣味のレース編みがバレた事が相当気に入らないに違いない。

「ところでアリス、君、僕の知らない間に白魔法を使えるようになったの？　それが本当だとしたら、すぐにでもスクール入学案件だと思うんだけど」

「へ？」

何の事？ 首を傾げたアリスの目の前にノアが先程のメモ用紙を取り出してきた。それにはすっかりはつきり『花冠1』のストーリーが書き込まれている。

「お嬢様が白魔法なんて使ってる所を見た事ないんですが」

そう言つてキリは何を思ったか、内ポケットに仕舞つてあつた折り畳みナイフで自身の指先を傷つけた。

「ひっ！ ちよ、な、なにしてんの!？」

「試すんですよ。お嬢様、はい、どうぞ」

「ど、どうぞ？ む、無理だよ！ 生まれてこの方私が魔法らしい魔法を使ってるの見た事無いでしょ!？」

「無いですよ。だから余計に信じられないんですが、試す価値はあるかと」

まさかこんな所でこんな無茶振りをされるとは思つてもみなかった。青ざめるアリスを他所にキリの指先に、あれよあれよという間に血の玉が出来上がる。

「キリ、そんな突然言つても……」

「ど、ど、どうしたら!？ ど、どうする!？」

パニックになったアリスはとりあえずハンカチでキリの傷口を押さえて強く念じた。

治れ！ と。その時、一瞬ハンカチが白く光った。その光にキリとノアどころか、アリスも驚いたように目を見開く。

（ま、まさか？ これが噂の……ヒロイン補正……？）

「嘘でしょう……？」

「まさか！」

「はわわわわ！」

驚いてハンカチをどけると、そこには血の玉が無くなっていた……が、それは一瞬の事だった。ハンカチを避けた途端、また普通に血がドクドクと出て来る。

「ただ止血してた……だけ？」

「はあ……こんな事だろうと思ってました」

「はわわわ……」

ハンカチにはしっかりとキリから吸い取った血がついている。そして今もキリの指先から血は出ていた。

アリスはそっと立ち上がって部屋に添えつけてある救急箱から消毒液と包帯を取り出し

て、いそいそとキリの指先を手当する。

「よし！」

「よし！　じゃないですよ、お嬢様。紛らわしい光出さないでもらえますか？　一瞬でも期待してしまつたではありませんか」

「ご、ごめ……ん？　私、悪くないよね!？」

（あぶないあぶない。流されて謝るとこだった）

フンと鼻を鳴らしたアリスを見て、キリが小さく笑う。

「でも、どうして光つたんだろぅね。キリ、何か気付かない？」

「そうは言われましても特には……あ、でもそう言えば、痛みが無くなった気がしますね」
「痛み？」

「はい。指先を怪我すると、普通はいつまでもズキズキするものですが、今はそれが一切ありません」

「……なるほど。もしかしたら……アリス、ちよつと外に出ようか。キリもついてきてくれる？」

「はい」

「へ？」

何か思いついたのか、ノアが突然アリスの手を取って立ち上がり、部屋を出て屋敷も出る。

ノアに連れて行かれた先は、バート・グリーン家だった。グリーン家は代々農家だ。そしてこのミルクは大変美味しい。チーズはもう、ほっぺが落ちるレベルだ。アリスはよくキリに隠れてここに来ては、牛の乳しぼりと作物の雑草取りをして、お駄賃としてミルクとチーズを頂いている。ちなみにバセット家の家庭菜園の苗も、このグリーン家から譲り受けたものだ。

「兄さま？」

「ちよっと待っててね」

ノアはそう言ってアリスとキリを置いてグリーン家に入って行ってしまった。

しばらくすると屋敷の中から困ったような顔をしたバートが顔を出し、アリスを見つけるとその顔をさらに歪ませる。

「ど、どうしたの？ バート」

「アリスお嬢……それが、キャシーが一週間前に溝に落ちて足を痛めたんですよ……」

「キャシーが!?」だ、大丈夫なんだよね!」

キャシーというのは、アリスが一番お気に入りミルクを出す雌牛だ。

燃費の悪いアリスの舌は、そんなよそらの犬にも負けないほど発達している。ほんの少しの味の違いで、その日の牛の体調でさえも当ててしまう程なのだ! とんだ特技である。

それを知っているバートは、いつも家畜に不調をきたしたら、まずアリスに食べてもらうようにしていた。

アリスの問いかけにバートは首をゆっくり振ると悲し気に視線を伏せた。

「それが折れてはないみたいなんですが、何せ痛みが酷いみたいで気が立ってしまつて治療もさせてくれんです。このままでは傷口からばい菌が入ってあつと言う間にお陀仏ですよ」

「そ、そんなつ!」

キャシーが居なくなるなど、そんなの耐えられない。アリスはどうにかして欲しくてノアを見上げると、ノアは真剣な顔をしてアリスの肩をポンと叩いた。

「アリス。さっきのを次はキャシーで試してみよう」

「えっ!」

「なるほど。それはいい案ですね。お嬢様、出番ですよ。ほら、ゴー！」

まるで犬でも扱うようなキリに背中を押された。いつものアリスなら嫌味の一つでも言うだろうが、今はそれどころではない。キャシーの命がかかっているのだ。

「ア、アリスお嬢、い、一体何を？ あ、危ないですからお止めください！」

「駄目だよ！ キャシーはもはや私の家族！ 毎日手伝いする代わりに美味しいミルクをくれる、もはや私にとっては母も同じ！ 絶対に助ける！」

「牛が……母？」

背中にキリの何とも言えない声が聞こえたが、アリスはそれを無視して牛舎に向かう。牛舎の中ではキャシーが痛みに耐えられないのか、酷く暴れていた。そんなキャシーに興奮した他の牛たちも暴れていて、牛舎の中は今や阿鼻叫喚だ。

これでは他の牛たちまで怪我してしまう。

アリスは考えた。無い知恵を絞る。どうすればいい？ どうしたらこの混乱を抑えられる？

「アリス、集中して。まずこの牛舎全体を魔法で包むようにイメージするんだよ」

「兄さま……」

「牛たちは酷く興奮しているから、まずはそれを落ち着かせよう。ほら、イメージして」
「イ、イメージ？ な、何を……」

「何でも構わないよ。アリスが落ち着くものなら何でも。例えばのどかな風景とか、小川のせせらぎとか、そういう心が落ち着くようなもの」

「……」

ノアは簡単に言うが、そんなものの咄嗟に何も思い浮かばない。

心が落ち着く……心が落ち着く……ふと頭に浮かんだのは、自室のベッドでゴロゴロ転がりながら推しの同人誌を読む自分の姿。うん、あれは癒しの一時だ。

そう思った瞬間、牛舎に柔らかな光が降り注いだ。するとどうだろう。今まで暴れていた牛がその光を浴びた途端、まるで我に返ったかのようにモツシャモツシャと餌を食べだしたではないか。

ほんの少し前まで阿鼻叫喚だった牛舎に、いつもの風景が戻る。

「や、やった……」

「うん。じゃあ次、キャシーの痛みを取ってやろう」

「うん！」

嬉しくなったアリスは意気揚々とキャシーに近づいた。キャシーは幾分落ち着きは取り戻していたが、やはり足が痛いのだろう。近寄るといつものキャシーからは考えもつかないほど警戒している。それでもアリスは怯まなかった。何せキャシーはアリスの母だ。母が痛い想いをするのはアリスも嫌だ。ついでに、キャシーほど絶品のミルクを出す牛は他には居ない。

アリスはこんな時でも食い意地が張っているのだ。

今までアリスは魔法のまの字も使えなかった。この世界には魔法が使えないものなど居ない。それなのに、だ。

けれどそんな自分とも今日でサヨナラだ。ニューアリスは魔法も使えるのだ！

アリスはキャシーにギリギリまで近寄ると、怪我をして血を流している後ろ脚に目をやった。

「兄さま触れないんだけど、どうすればいいの？」

「うーん、眠らせてみるとか？」

「なるほど！ 眠いイメージ、眠いイメージ……」

琴子で居た時の眠る前の習慣、スマホで推しの顔を見ながらニヤニヤする事。するとど

うだろう。いつもあつという間に夢の中に引きずり込まれるのだ。その威力たるや、きつと睡眠薬も真つ青だっただろう。

「アリス！ キャシーが眠ったよ！ 今のうちに魔法をかけよう」

ふと目を開けるとキャシーが痛みを堪えているのか、苦悶の表情を浮かべながら眠っている。

アリスはそんなキャシーの後ろ脚の怪我に両手を添えると、強く願った。

「痛い痛い、あつちの山まで飛んでいけーいけー！」

そう叫んだ瞬間、両手からさつきよりもずっと強い光が溢れた。それと同時にキャシーの苦悶の表情もスツと消える。

「ぶもお？」

パチリと目を開けたキャシーは不思議そうな顔をしながら立ち上がると、アリスの顔を大きな舌でベロベロと嘗め回してきた。

「早く治療を！」

アリスが叫ぶと、啞然とした顔をして控えていたバートと獣医があわあわとキャシーの怪我の手当を始めた。しばらくして。

「いやあ、まさかアリスお嬢にこんな魔法が使えるなんて思ってもみませんでした！ 本

当に、アリスお嬢はキャシーの命の恩人ですな！ いや、キャシーは人ではないから恩牛ですかな!?」

ハッハッハ！ と嬉しそうな顔をしてバートはキャシーの鼻っ面を撫でた。それを受けてキャシーも目を細めてぶほぶほ言っている。

「良かった……キャシー……キャシーが居なくなったらと思ったら、私……」

キャシーの怪我は思ったよりも酷かった。確かに折れては居なかったようだが、汚いドブに落ちたのが悪かったのか、既に傷口が化膿し始めていたのだ。

けれどアリスの魔法が利いていたのか、膿を取り除く作業をしている時もしみる傷薬を塗り込んでいる時も、少しも痛がる事は無かったという。

「アリス、よくやったね」

「兄さま！ 私、私にも魔法が使えたよ！」

「うん。君の魔法は素晴らしかったよ。僕も驚いた。ねえ、キリ？」

それまでただ黙ったまま動向を見守っていたキリだったが、ノアに問われてようやく口を開いた。

「そうですね。魔法自体は素晴らしいですが、私は牛を母と言い切ったお嬢様に驚きを隠

せませんね」

「そこお!? もっと褒めていいよ!?」

「お嬢様、褒める事を強要するのはどうかと思いますよ」

意地悪な顔をしてそんな事を言うキリなど放っておいて、アリスはノアに向き直った。

「兄さまのおかげだよ! 兄さまは教え方が凄く上手なんだね!」

「そう? そんなに褒められると僕も嬉しい。でも、アリスが的確にイメージ出来たからだ。よ。一体、何をイメージしたの?」

「え? ゴロゴロ転がりながら推しの本を読んでいる所と、寝る前に推しの写真を見つめて眠りにつく所だよ」

その言葉にノアとキリは凍りついた。

「...ノア様、いちいちお嬢様の思考を聞いてはいけません。お嬢様はノア様が思っているよりもずっと脳内にお花が咲き乱れているし、性格的には聖女から一番程遠い人種です」

「...うん、ごめん」

ノアはてつきりアリスは、川のせせらぎや森の囁きとかをイメージしたのだろう、と思いきり込んでいたのだが、その点キリは流石だ。アリスの事を大変よく理解している。

「でも、私にも魔法が使える事が分かって良かった！　ずっと悩んでたんだよ！　兄さまのおかげだよ。ありがとう、兄さま！」

「魔法に大事なものは強い意志だから、アリスは今までそこまで強い意志を持った事はなかったのかもね。キリの傷やキャシーの怪我を見て、それを心の底から助けたいと思ったから発動したんだと思うよ。まあ、これはフオスタースクールの先生の受け売りだけど」

ノアははにかみながらそんな事を言って頬をかいだ。受け売りだろうが何だろうが、アリスにそれを教えてくれたのはノアなのだから、やはりノアに感謝を伝えたくてアリスはノアに抱き着くといつものように頬ずりをする。

「で、結局お嬢様の魔法は何なんですか？　白魔法という訳ではないですよね？」

「うーん、白魔法であれば治癒までしてしまうもんね。でも、アリスは治癒は出来ない。

その代わり痛みを取ったり落ち着きを取り戻させる事が出来る……これはおそらく、魅了、じゃないのかな」

「魅了……ですか」

「みりよ……」

これまた地味な魔法である。ヒロイン補正は一体どこへ行ってしまったのか。ふう、と

悩まし気なため息を落としたアリスとは違い、何故かノアは真剣な顔をして考え込んでいる。

「兄さま？」

「アリス、君はやっぱ早く学園に入学した方がいいのかもしれない」

「え？ ただの魅了なの？」

魅了なんて、本当にありふれた魔法だと思うのだが。そんなアリスの思考を読んだみにノアが首を振った。

「ただの、だなんてとんでもない。魅了はあくまで人にしか効かない。というのも、人とはとても複雑な思考をするからなんだ。魅了は本来、人の思考の隙間に入り込んで考えをほんの少しだけ変える魔法なんだ。だからとても時間がかかるんだよ。でも、アリスのは違う。複雑な考えをしない動物に効いたうえに、これだけの数の牛を一瞬で大人しくさせる事が出来た。痛い、怖い、という感情を一瞬で変えてしまうなんて、とんでもない事だよ。使いようによっては凄いい魔法だね。でも間違えた使い方をしたら……とても恐ろしい魔法だ」

「……」

（ま、待って。それだけ聞いたら私まるで……）

「まるで魔女が使いそうな魔法ですね」

「言う!?　ねえ、言っちゃう!?」

キツと睨んだ視線を避けるようにキリはアリスからスツと視線を逸らした。

（コイツわざとだ！　絶対にわざとだ！）

「僕の可愛いアリスが魔女なんかになる訳ないじゃない。ねえ？　アリス」

「兄さま……」

ヨシヨシと頭を撫でてくれるノアの手はとても優しく、アリスは思わず目を細めた。

魔女だなんて本当に失礼だ。傲慢ではないが、アリスは自分の得にならない事はしたくないのだ。だから誰かが痛いのは嫌だし、悲しい想いもしたくない。つまり、アリスはとも自己中なのである。決して胸を張って言う事でもないのだが。

そしてアリスの脳内は基本的にはお花畑である。そんなお花畑が考える事など、知れている。

「ねえアリス、覚えてる？　過去アリスの十四回目」

「十四回目？　えっと……」

「断罪エンドですよ、お嬢様」

「わ、分かつてるよ！ 兄さま、それがどうかしたの？」

「うん。あれって、もしかしてアリスの力が暴走したんじゃないのかな？ それこそ、何かあつてキリの言う様に魔女になつてしまったのかも」

「なるほど、考えられますね。基本単純バカだから誰かに何か吹き込まれたか、もしくは極限までお腹が減つてたか……」

「ちよつと!？」

いくら燃費の悪いアリスでも、お腹が減つたからと言って暴走したりはしないと思ひしいし、今はつきりバカつて言つたな？

「そんな理由は流石に兄としては悲しいけど、まあそうだね……アリスだからね……」
ポツリとノアはそんな事を言つて遠くを見ている。これはノアにもバカだと思われている。

「も、もういい！ 草むしりしてくる！」

アリスはプンプン肩を怒らせてすつかり元気になったバートの元へ向かった。

バートはキャシーの事が落ち着いたからか、今は畑に居た。腕を組んで仁王立ちをして、目の前の小麦畑を睨みつけている。

「バート、どうしたの？」

「ん？ アリスお嬢。いやね、最近どうも小麦の調子が悪いんですよ。何が原因かも分からないから困ってます」

「小麦が？ これ、食べてもいい？」

「は？」

言うが早い、アリスは小麦の穂から実を少量取って口に放り込んだ。それを見て慌てたのはバートだ。

「ア、アリスお嬢!? な、何やってんですか！」

叫び声にも近いバートの声を聞きつけてノアとキリが慌てて走ってきた。

「バート？ どうしたの？」

「ノ、ノア坊ちゃん！ ア、アリスお嬢が生麦食うんです！」

「は？ ちょ、アリス！ 駄目だよ生麦は！ 早くぺっしなさい！ ペっ！」

バートの叫びにノアとキリはギョツとしてアリスの顔を押さえてアリスに麦を吐き出させようとしてくるが、当のアリスはと言えば口の中で生麦の味を確かめるのに必死だった。

モグモグと口の中で生麦を転がしていたアリスは、やがて生麦を飲み込むと自信満々な顔でバートに告げる。

「日光不足だよ！ あと、水に何か混ざってるよ」

「へ？ に、日光？」

「うん。あと水」

自信満々なアリスとは打って変わって、ノアもキリもバートも変な顔をしている。

「アリス？ そんな事が……生麦食べて分かるの？」

「わかる！ ねえ兄さま、植物にも魔法、効くかな？」

「んん？ んー……どうかなあ……」

もしも植物にも魔法が効くのなら、元気になる魔法をかけてやればいいのではないか？
そう思ったアリスは目の前の畑を見つめてイメージする。

推しのイベントに行ってグッズ戦争の列に並んでいた時のイメージだ。

そう、負けてはいけない。少々日光が足りないからと言って、腑抜けてはいけない！

両手を空に向けて目をカッと見開くと、畑にキラキラと光が降りそそいだ。

「お、おお！」

バートはその光を見て何やら興奮しているが、残念ながら特に変わった事は何も起こらない。

「やっぱり駄目かあ……」

シュンと落ち込んだアリスの肩を慰めるようにノアが叩いた。

「植物はすぐには結果は出ないと思うな。それよりも、水に何か混ざってるって？」

「うん。ちよつと変な味がしてた。生臭い感じ」

それを聞いたバートがハツとした顔をしてこちらを見る。

「そう言えば一週間前の豪雨で、畑に引いてる川が氾濫したんですが、そんな時に川に何かあったのかも……特に水量は減らなかったんで誰も見に行かなかったんですが……」

「見に行こう」

ノアの号令を合図に四人は川の上流目指して登っていく。

ちなみに今朝アリスが野菜を冷やしていた小川は、この川の源泉から直接引いてきている。

どれぐらい歩いただろう。ふと、バートが何かに気付いた。

「あれ？　ここ、確か右から水が流れてたはずなんだが……」

首を傾げたバートの言葉を裏付けるように、もう少し進んだ所でキリが何かに気付いた。「バートさん、あれ、肥溜めですよね？　何か土砂が中身を押し出してるように見えるん

ですけど、もしかして流れが変わった水に中身が混ざってるんじゃない？」

キリの指さす遙か先には確かに筒のような何かがある。そしてキリの言う通り、上側から土砂がその筒の中に流れ込んでいた。

「う、うおおお！ て、てえへんだ！」

バートは現場に駆け寄って鼻を塞ぎながら肥溜めの中を覗き込んで、そのあたりを見て回っていたが、やがて予想が当たっていたのか慌てて戻ってくるなり、アリスの手を取ったかと思うと力強く上下に揺さぶった。

「アリスお嬢！ お嬢のおかげです！ ありがとう！ すぐに皆連れてきて土砂どけねえと！」

「川の流れも戻しておいた方がいいと思うよ、バート」

「あ！ そうですね！ ノア坊ちゃんもキリ坊もありがとう！ それじゃ！」

そう言つてバートは三人をその場に残して物凄いスピードで村に戻って行つた。

「さて、僕達も帰ろつか。それにしても凄いな。こんなのよく分かつたね、アリス。キャシーも大丈夫だったし、畑が大惨事にならなかつたのはアリスのおかげだよ。君が居なきやキャシーは助からなかつたかもしれないし、作物は駄目になっていたかも。それどころかあの水を生活用水に使つてゐる家も多いから、何か疫病が発生していたかもしれない。ア

リスは未然にそれを防いだんだ。凄いことだよ」

「そうですね。お嬢様にあんな特技があるとは思いませんでした。ただの高燃費食欲お化けでは無かったのですね」

「言い方！」

「ははは！ 上手い事言うね、キリは」

「兄さまも！ 笑いごとではなくてっ」

ぐうう、きゆるるる…。

突然の何とも言えない気の抜けた音がして、アリスはお腹に手を当てて無言で空を見上げた。

今日も空は高い。高燃費アリスにしてはよく持った方だ。自分にそう言い聞かせる。隣でノアも、あのキリでさえ肩を震わせている。

「帰ったらじきに夕食です。その前に牛の涎を落としておいってください、お嬢様」

「だってさ、アリス。帰ろ」

「うん！」

ご飯と聞けばアリスの機嫌はすぐに直る。そんな現金なアリスにノアもキリも肩をすく

めた。

屋敷に戻るとすでにハンナがお風呂の用意をしてくれていた。牛の涎でズルズルになったアリスを見て、大きなため息を落としている。

「ノア坊ちゃんまでそんなに汚れて……一体何をしてらしたんです？」

「ごめんね、ハンナ」

天使のような笑顔を振りまいたノアを見て、ハンナはもう一度ため息を落として諦めたようにその場を後にした。

「アリス、先に入っておいで。僕は父さんにさっきの話をしてくるよ」

「うん！　じゃあ兄さま、また後で」

そう言って二人は別々の方に歩き出す。もしかしたら、アリスはフォースタースクールに編入する事になるかもしれない。

今までのアリスならきつと喜んだのかもしれない。けれど、今のアリスの想いはただ一つだ。

「フォースタースクールの食事情をしつかり兄さまに聞いとかなきゃ！」
どこまでも食い意地第一のアリスである。

それからの数日はめまぐるしく過ぎた。

まずノアがアーサーを説得して、ノアがスクールに戻るのに合わせてアリスのスクールへの入学が決まった。ちなみにアリスについてくるのは何故かキリで、お互い顔を見合わせてうんざりしたような顔をしたのは内緒だ。

そしてアリスがでたらめに気合いを入れた畑の小麦が、あれから何故かずっとピカピカしていると言う。夜にもピカピカしているので、今では近所のちよつとした観光スポットになっているらしい。

一番心配だったキャシーは皆が驚くほどのスピードで怪我を克服し、あれから毎日アリスに新鮮なミルクをご馳走してくれている。スクールに入る事自体はアリスも楽しみなのだが、キャシーのミルクが毎日飲めなくなるのは辛い。それをバートに伝えると、バートは定期的にスクールにチーズを送ってくれると約束してくれた。

そしてやってきた月末。明日はいよいよスクールに編入する日だ。

アリスとノア、キリの三人は荷物の準備を終えると、自然とアリスの部屋に集まった。

「さてアリス。明日からいよいよスクールなんだけど、もう心の準備は出来てる？」

「もちろん！ 早く食堂のご飯が食べたい！」

「うん、いつも通りで安心した。でね、アリス。僕は昨日この本を改めて読み返してたん

だけど、攻略対象にはこの事を話しておいた方がいいんじゃないかな」

「えっ!? に、兄さま、本気?」

（そ、それは転生系ストーリーの禁じ手なのでは!?）

「本気だよ。もちろん、すぐに話したって信じてくれないだろうから様子見つつだけど」

「で、でも……転生ストーリーはそんな事したら物語が破綻しちゃうんじゃない?」

モゴモゴいうアリスに、キリが隣からきっぱりと言った。

「お嬢様、お嬢様にとってはここはゲームの世界かもしれませんが、私達には現実です。それに、琴子嬢の時ならいざ知らず、あなたも今は立派なこの世界の人間なんですよ。いつまでもこのループの中にいるのはお嬢様も嫌でしょう?」

「!」

頭をガツンと殴られた気がした。キリの言う通りだ。琴子の人生は既に終わっているのだ。記憶を受け継いでいるかもしれないが、今はここがアリスの現実である。いつまでもキリを攻略対象……とはもうこれっぽっちも思っていないが、この世界の人達をただのキャラクターだと思えるべきではないのだ。

「……そうだね。キリの言う通りだよ。ごめんなさい」

殊勝な態度で頭を下げたアリスを見て、キリは何故か大きなため息を落とす。

「お嬢様は本当にチョロいですね。もつともらしい事を言われるとすぐこれだ。この調子だとやっぱり色々心配でしかありませんね、ノア様」

「う、うーん。まあ、今のはキリが全面的に正しかったから何とも言えないけど……まあ、心配ではあるね。キリ、アリスの周りの人間はしっかりチェックしておいてね。もちろん報告も忘れないで」

「はい」

「ねえ、ねえねえ、二人とも何のお話してるの？」

結局謝ったアリスは間違いだったのか？ 不思議そうな顔をするアリスを見てキリとノアは不安そうな顔をしている。

「ああ、アリスと双子だったらずっと一緒に居られたのに！」

「大丈夫です。お嬢様の手綱はしっかり握っておきます」

「任せたよ、キリ。さて話を戻そうか。それでね、攻略対象の他にももう一人、絶対仲間に入れておいた方がいい人があるんだ」

不安そうな顔から一変、ノアが真剣な顔をした。アリスは神妙に頷いて次の言葉を待つ。

「キャロライン・オーグ。彼女も自分の運命を知っておくべきだ」

「えっ!? ま、まさかの悪役令嬢にもネタバレするの!?」

予想もしていなかった名前にアリスが目を白黒させていると、キリが少し考えて頷いた。
「確かに、公爵家の力は大いし仲間に引き入れるのは得策ですね」

「そう。公爵家の力もちろんだけど、彼女にはカリスマ性がある。あれを使わない手は無い」

「兄さまもキャロライン様の事知ってるの?」

純粹なアリスの質問にノアは頷いた。

「知ってるも何も、同じクラスだからもちろん知ってるよ。ついでに言うと、ルイスもカインも同じクラスだよ」

「え…ええええ!? は、初耳だよ!?」

驚きを隠せないアリスを見て、ノアが申し訳なさそうに笑った。

「そう言えば言っていなかったかもね。ごめんごめん、スクールに着いたらちゃんと皆にアリスの事、紹介するから」

「もう! 他には隠してない!?」

怖い顔を作って詰め寄ったアリスに、ノアは両手を挙げて降参のポーズをとる。

「ないない！ クラスメイトと言っても、僕は男爵家、向こうは王家と公爵家だよ？ そんなに話すこともないよ」

「それもそっか……」

この世界は未だに格差社会だ。家柄がモノを言う。だからキャラインが断罪されても島流しとか辺境に爵位を取り上げられて追いやられたりだったが、アリスの断罪では有無を言わず処刑だった。それぐらい爵位が何よりも重要なのだ。

「そうそう。落ちぶれた男爵家の息子なんて、誰も気になんてしやしないよ」

「兄さまってば。お父様が聞いたら泣いちゃうよ」

クスクスと笑うアリスを見てノアも楽しそうに笑った。そんな兄妹水入らずに水を差したのはキリだ。

「お嬢様、ノア様、明日は早いので今日はこの辺にしておいたらどうです？」

「ああ、そうだね。それじゃあアリス、キリ、おやすみ」

「うん、おやすみなさい。キリもおやすみ」

「はい。おやすみなさいませ」

そう言つてキリとノアは部屋を出て行つてしまった。アリスは忘れないようにノアが置いて行つた本と大量のメモを鞆に詰め込み、嚴重に鍵をかける。

その夜、アリスは夢を見た。夢の中でアリスは宙に浮いた状態で断頭台の上に晒された過去の自分を見下ろしていた。

うつ伏せに伏せられているから顔は見えないが、声だけはしっかりと聞こえてくる。

『私じゃない！ 私は何もしてない！』

どれだけ叫んでいたのか、声はかすれて時折混じる咳が喉の限界を告げていた。思わず耳を塞ごうとした今アリスだったが、不意に過去アリスの声がふっと掻き消えた。それと同時に別の誰かの声が聞こえてきたのだが、どうやらそれは誰にも聞こえなかったらしい。過去アリスと今アリス以外には……。

『可愛いアリス。可哀相なアリス。愛しいアリス。私のアリス——』

その声にハツとしたように顔を上げた過去アリスの顔は、何故か笑顔だった。花が綻んだような笑みに、薄く開いた唇から漏れた最後の言葉は——『シャルル』

「ひやあああああ！」

汗びっしりで飛び起きたアリスは思わず自分の首を確認する。

「ついでる……ちゃんとくつついでる……」

ゆっくり深呼吸をして額の汗を拳で拭っていると、ノックの音も無しにキリが顔を出した。

「また寝ぼけてるんですか、お嬢様」

「キ、キリ……良かった……ちゃんと居る……」

フラフラと何かを求めるように両手を伸ばしてキリに触れようとする、その手をペチンとキリによって叩き落された。

「な、な、な！」

「汗拭いた手で触らないでください」

「ひ、ひど！」

（ねえ、ほんとにこの人攻略対象なの？ 何かの間違ひなんじゃないの？）

一瞬そんな考えが頭を過ったが、昨夜もうそんな風に皆を見るのを止めようと決意したのを思い出して、アリスはため息を落とす。

まあ、たとえ今も攻略対象だとしてもキリはない。コイツだけは絶対ない！
アリスの心は酷く傷ついた。

「もうじき朝食ですよ。着替えてさっさと席についてください」

「朝ごはん!?　すぐ行く!」

「ぱああ、と顔を輝かせたアリスはいそいそと支度を始めだした。それを見てキリも部屋を出て行く。

前言撤回。おそらくアリスの心はとても頑丈な鉄で出来ている。

朝食をかき込むように食べたアリスは、キリに急かされるようにノアの待つ馬車に乗り込んだ。昨日のうちに父と屋敷の皆には挨拶を済ましておいて正解だったかもしれない。

「おはよう、お寝坊アリス」

「おはよう、兄さま!　そうだ!　聞いて!」

アリスは挨拶もそこそこにすぐに今朝見た夢の話をつアに告げた。

ほんの少しも我慢できないアリスである。

「出たね、シャルル」

「うん。どうして声が聞こえたんだろう?」

「うーん……それだけでは何とも言えないけど、それを聞いた過去アリスは笑ったんだよね?　もしかしたら十四回目のアリスもシャルルに会えてたのかな……それにしても、朝か

ら随分嫌な思いをしたね。大丈夫？」

優しく問いかけてくるノアに、アリスはコクリと頷いた。あんな夢を見たのに思ったよりもアリスは冷静だった。朝食を食べている間は夢の事なんて忘れていたほどだ。ただ一つ思ったのは、断罪アリスの最後の顔が、苦痛に歪んだものではなくて良かった、という事だった。

アリス、学園に降り立つ

1 アリス、学園に降り立つ

馬車に揺られて半日。思ったよりも早くスクールに辿り着いた。

フォスターパブリックマジックスクールは、王都から随分離れた辺鄙な場所にあつた。つまり、辺鄙な場所に住んでいるアリスの家からは大変近い！ここはゲーム通りでアリスはホッとしていた。

フォスタースクールは、フォスター島と呼ばれる出島に建てられていた。

寮完備でもちろん食事は超一級。アリスには考えられないほどの予算がこの学校に惜しみなく使われているという。

フォスター島の歴史は意外にも比較的に新しい。何でも、このルーデリアには昔から質の良い魔法使いが多く生まれたので、宮廷魔法省のトップ、クラーク家の祖先が資産をほ

とんど投げうつて出島を作り、そこにこの学校を建てたそうだ。今ではこの学校も国家事業に含まれているが、それまではクラーク家の資産だけで賄っていたというのだから恐ろしい。

通っている学生の殆どは公爵、侯爵、伯爵家で、子爵家は数える程度。男爵家はおそらく今はノアしか居ないのではないだろうか。

フォスター島に到着すると、ここで庭番兼御者のジョージとはお別れだ。

アリスはジョージにハグとキスをして別れたが、その時にしっかりとあるものを受け取っていた。そう、各種野菜の苗とキャシーのチーズだ。

「アリス……チーズはいいとして、野菜の苗なんてどうする気？」

「もちろん植えるんだよ！」

「……」

どこへ行ってもアリスはアリスである。

「お嬢様、少しは自分の荷物持ってください。どうして追加の荷物がこんなにあるんですか、全く」

大きな荷物はほとんど先に送ってしまい、今キリがフォスター島に向かう馬車に運んで

いるのはほとんどが追加でアリスが詰めた荷物だった。

「アリス、そっちは僕が持つから、君はこれを持って」

「ありがとう、兄さま！」

そう言つて手渡されたのは本が入った小さな鞆だ。アリスはその鞆を胸に抱えると、意気揚々と待つていた学園の馬車に乗り込んだ。

「これでしようもない物ばかり持つてきてたら没収しますからね」

最後に馬車に乗り込んできたキリがそんな事を言う。どこに居てもキリもキリだ。アリスは少しも緊張していないキリを見て感心したように頷く。

やがて馬車はフォスター島に向かう橋を滑るように走り出した。

窓を開けて外を覗くと橋の向こうはすぐに海だ。

「きれーい！」

「こら！ あんまり乗り出すと落ちるよ、アリス」

首根っこをギュっとノアに捕まれたアリスは猫のようにシユンと大人しくなった。

「そうだ、忘れてた。寮の部屋なんだけど、伯爵家以降は二人一部屋なんだ。それでね、本来ならアリスは男爵家の女の子と同室になるはずなんだけど、男爵家が今、僕とアリスしかないから今回は僕と同室になったって先に伝えとくね。僕達からしたら願ったり叶

ったりだと思ふし。あ、ちゃんと部屋は別だから安心して。それから、続きの部屋はキリの部屋になつてゐるんだけど、キリもそれでいい？」

「もちろんです。その方が色々対策もしやすいので」

そう言つてチラリとアリスを見る目が全て物語つていた。コイツだけは絶対に野放しにはできない、と。しかしそんな視線など今更気にしない。アリスのハートは鉄のように頑丈なのだ。

「兄さまと同室から。でも、それじゃあ兄さまの今までの同室の人は？　もしかして追ひ出しちゃった？」

アリスが入つてきた事でノアの元々の同室の人を追ひ出したのだとしたら、それはとても申し訳ない気がする。

そんなアリスの心配をよそにノアは困つたように笑つて首を振つた。

「大丈夫、そんな人居なかつたから。僕は一人部屋だったんだよ、ずっと」

「えっ!?　も、もしかしてイジメ……?」

「いやいや！　さっきも言つたけど、大体同じ爵位の子同士が部屋に入るんだ。でないと色々と厄介だからね。でも男爵家は僕しか居なかつたから、一人部屋だったってだけだよ」

「なんだ、そつかり。ビックリした！」

アリスは無い胸を撫でおろしてまた窓の外に視線を移すと、前方と後方に何台もの馬車が一列にズラリと並んでいる。

そのあまりにも長い馬車の列を見ると、途端にアリスのお腹が鳴った。

アリスはハツとしてお腹を抑えたが、もう遅い。その音はノアにもキリにもしつかり聞かれていた。

「えっと、何か食べ物あったかな」

動じることなくごそごそと食べ物を探してくれるノアとは違ってキリの視線は非常に冷たい。

「あれだけ食べて、まだ食べます？」

「あ、あったあった。良かった、一応持ってきておいて。はい、とりあえずこれで我慢し
といてね、アリス」

「ありがとう兄さま！」

手渡されたのはハンナがいつも焼いてくれるクッキーだ。これは昨日、アリスも貰った。

どうやらノアはこんな事もあるうかと、クッキーを全て食べてしまわずに少し残しておいたらしい。流石アリスの兄だ。妹の食い意地をよく知っている。

「ノア様、お嬢様を少し甘やかしすぎではありませんか？」

「だって、可愛いんだから仕方ないじゃないか」

そう言つてアリスの頭をヨシヨシと撫でてくれるノア。キリはそんな兄妹を白い目で見ている。

「昔はねー、兄さまのお嫁さんになるんだもん！　つて言つてずっと後ついて回つて、本当に天使みたいに可愛かつたんだから！　もちろん今もアリスは僕の天使だけどね」
ニコニコ笑顔のノアを見てキリは諦めたように呟く。

「……ノア様は優秀なのに、どうしてそんな所だけ旦那様そっくりなんですか？」

残念だ。キリの目はそう言つていた。そして蔑むような視線をアリスに向けて来る。

「い、言いたい事があるなら言えばいいんじゃないん！」

「言つていいんですか？」

真顔のキリを見てアリスは咄嗟に首をブンブン振った。

「や、やっぱ言わなくていい！」

馬車の中でそんな言い合いをしていると、ようやくアリス達の番が回ってきた。キリが荷物を必要以上に重そうに持つて降りている。

「ここから全てが始まるんだね！」

本が入った鞆を握りしめて気合いを入れたアリスは、フォースタースクールの重厚な門をノアとキリと共に通り抜けた。

二年生の途中から編入をしたアリスは、やっぱりクラスの注目の的だった。ましてや男爵家。色々噂にならない訳がない。

（こんなヒロイン待遇はいらないんだけどなあ）

クラスで新学期の挨拶を担当の先生から受けて、その後は自由行動になった。恐らく大半の人は寮に戻って明日からの授業に向けて準備をするのだろうが、いかんせんアリスはスクールに到着した途端、待ち構えていたクラス担任のカーター・ヒックスに捕まり、そのまま教室に連れて来られた為に寮までの道が分からないのだ。

「あのお、すみません」

おずおずと斜め前に居た少女に声をかけてみたが、少女はチラリとこちらを見てフンと鼻を鳴らして教室を出て行ってしまった。

（まあね、そりやこうなるよね。過去アリスはどうやってこの空気に馴染んだんだろ……そう言えば過去アリスの話にクラスメイトとか友達の話は一切無かったっけ……）

過去アリスまさかのぼっち説にアリスが怯えていると、教室の前方のドアからアリスを呼ぶ声がした。

「アリス！ 良かった、まだ居て」

「！ 兄さま！」

ぼっち脱出成功である。そうだった。ここにはノアが居たのだ。

アリスが鞆を持ってノアの元に駆け寄ると、ノアの後ろにはキリも居る。そんな二人をチラチラとクラスメイトが見ていく。きつと、こんな年になって兄に迎えに来てもらうなんて、とか何とか思われているのだろう。そんな風に感じてアリスはシュンと項垂れた。被害妄想も甚だしいアリスである。しかしアリスの鉄のハートはそれぐらいでは折れない。

クラスメイトの視線を吹っ切るように、アリスは顔を上げてノアの後ろに居るキリに声をかけた。

「キリも一緒だったの？」

「私はここの従者の仕事について説明を受けていたんです。たまたまノア様の教室の隣で」
「大丈夫だった？ 難しそう？」

いくら心臓に太い毛が生えているキリとは言え、慣れない仕事は辛かろう。そう思って

尋ねたのだが、キリはちりりとこちらを見て意地悪な笑みを浮かべた。

「お嬢様がご自分の事をちゃんとしてくだされば、何も難しい事はないですよ」

「……」

どうやら暗に、お前の世話が一番めんどくせえんだよ、と言われてるようだ。けれどおかしい。それはノアにも言えるのではないのか。

アリスのそんな視線に気づいたのか、間髪入れずにキリは言う。

「ノア様はずっと一人でここに通ってらしたんですから何の心配もないです。ノア様は」
「ぐぬう」

グウの音も出ないとはこの事だ。アリスは苦虫を潰したような顔をしてフンと鼻を鳴らすと、ノアの後ろに隠れた。二人のやり取りを黙って聞いていたノアが楽しそうに笑う。

「君たちはどこに居ても本当に変わらないね。アリス、少し早いけど食堂に行こうか。昼になるといつも席が埋まってしまうから」

「うん！」

二言返事をしたアリスはノアに手を引かれて食堂への廊下を歩き出した。

「しっかり覚えるんだよ、アリス。毎日僕と食べる訳にはいかないだろうから」

「分かった。がんばる」

アリスの居た校舎は第二校舎だった。食堂は第一校舎にあり、四年生から第一校舎に移る。

フォースタースクールは十三歳からの六年制で、十四歳のアリスは再来年、第一校舎に移れるようだ。ちなみに、ノアはアリスの二つ上である。

食堂に着くと、既にアリス達と同じように考えていたであろう人達で溢れていた。ノアはキリに席を確保してくるよう伝えたと、アリスに丁寧に食事の購入方法を説明してくれる。

一通り説明を聞いていたアリスは目の前の機械を見て目を丸くした。

（こ、これは券売機！ 食券制度なんだ！ 内容は引くほど豪華だけど……何、季節の温野菜と白身魚のテリーヌって……）

一応補足しておく、この世界の動物や食べられる植物は地球とさほど変わらない。ただ地球と大きく違うのは、地球よりはずっと魔法植物の数が多いという事だろうか。後は、食べ方だ。これが一番大きな差かもしれない。

まじまじとメニューを眺めていたアリスは、沢山あるメニューの中から気になった物を

ノアから受け取ったカードで注文した。

するとフォースタースクールの専属メイドが席まで持ってきてくれるらしい！ なんと！

「す、すごいね、兄さま」

興奮した様子でキリが確保してくれていた席につくと、隣にノアが腰かけて笑った。

「まあ、大体がコース料理だからね。ありがたい、キリ。ちなみにキリには従者専用の食堂が隣にあるから、これを使って。それはキリ専用のだから、僕に返さなくていいよ」

そう言っただけでノアはキリにアリスにくれたのとは色違いのカードを手渡した。

「ありがとうございます」

「ゆっくり食べておいで」

「はい」

それだけ言ってキリは颯爽と姿を消した。心なしか足取りが軽く見えたのは、絶対に気のせいではなかったはずだ。

何だかんだ言いながら、やはりキリもここに来るのを楽しみにしていたのだろう。

アリスが学園に編入して半月ほど経った頃、この日もようやく学園にも馴染みはじめた。相変わらず友達には居ないが、アリスがノアと他愛もない話をしながら食事を待っている

と、急に食堂がざわつき始めた。なんだろうと顔を上げると、今まで団子のようになっていた食券機周りが急に蜘蛛の子を散らすように人が居なくなつて、代わりに現れたのは、
「こ、攻略対象達……悪役令嬢付き……」

アリスは食堂に入ってきた一同を見て口をあんぐりと開けた。スチルで何度も見た顔ぶれだが、やはりイラストと現実は違う。華やかすぎる。

同じ学園に居るはずなのに今までどうしてこの人達と顔を合わせなかったのだろうか、と思う程すれ違う毎日だったのだが、おそらくノアが、アリスが学園に慣れるまで時間を調整して彼らと出会わないようにしてくれていたのだろう。

「こら、アリス！」

思わず漏れた声に隣からノアが、シー！　っと人差し指を立てて注意してきた。

「ご、ごめんなさい。つい……凄いな」

「これを見たくて入学した子も居るぐらいだからね」

そう言つて苦笑いを浮かべたノアだったが、すぐに顔を顰めた。

「やば、気づかれた」

「へ？」

ポツリと呟いたノアの視線の先には、こちらに気付いたルイスの姿。

何故かじつとこちらを見つめて、いや、睨んでいたルイスは隣に居たカインに何か告げると、ツカツカと歩み寄ってきて一言。

「ノア・バセット！ 今期こそ覚悟を決めてもらうぞ！ ん？ そちらの令嬢は誰だ？」
(生ルイスキターー！)

思わずポカンと顔を上げてルイスの顔を見つめていたアリスだったが、ふと思い出して慌てて席を立つて挨拶をした。

「お初にお目にかかります。ノア・バセットの妹、アリス・バセットと申します。以後、お見知りおきを」

何度も何度もキリに叩き込まれた挨拶を嚙まずに言えた事にホッとしたアリスは、チラリとノアを見た。ノアはそんなアリスを見て小さく頷いている。

「ああ、聞いている。何でも不思議な魅了を使うと聞いたが？」
「へえ。流石に早耳だね」

「お前な、俺を誰だと思ってるんだ？ 流石に時期外れの編入生の情報ぐらいは入っている。カインこっちだ！ ここが空いてるぞ！」

そう言ってこちらの意見など全く聞かずにルイスはノアの正面にドカリと座った。

「ルイス？ 僕は許可してないんだけど？」

笑顔でルイスにそんな事を言うノアは、アリスが初めて見るノアだった。

（兄さま、目が笑ってない！ 怖い！ 怖いよ！ てか、相手、次期王様だよ！？ 何で呼び捨てなの!?）

オロオロするアリスに気付いたノアが笑みを深めてルイスを見つめると、ルイスも少したじろぐ。

「あ、空いてるんだからどこに座っても構わないだろう？」

「空いてるんじゃないくて、空けたんだよね？ そういうのは感心しないな」

確かにさっきまで側に座っていた人たちがいつの間にか移動している。

けれど、ルイスの言葉も間違っていない。こんなに混んでるのに何故かアリス達の周りは空いていたのだ。そしてその原因はアリスのお花畑の脳みそでもすぐに理解できた。

兄もまた、この学園では浮いているのだという事を！

「はわわわ」

これは平穩に学生生活を送るにはノアの側に居ない方がいいのでは？ そう思うのに、当のノアはと言えば挙動不審なアリスのおでこに手を当てて首を傾げている。

「アリス、お腹減ったの？ もうちょっと待とうね。もうすぐ前菜が来ると思うから」

「う？ うん、だ、大丈夫」

妹の心、兄知らずである。

今すぐにでも食事を持ってキリの元へ行きたい。こんな人達に囲まれて食事なんてとてもではないが出来そうにない。だって、何だかルイスとノアの後ろに大きな虎と龍が見えるのだ。

そんな三人の元へ攻略対象達が続々と集まってくる。

（み、皆何か背後に背負ってるんだよう！ 怖いよう！）

「ノアじゃーん！ あれー？ このカワイコちゃんどこの子？」

遠慮も何もなしにカインがアリスの隣に座った。アリスの内心は汗ダラダラである。何せ過去アリスは毎度毎度このカインに振り回されていたからだ。

「僕の妹だよ。手出したら、ただじゃおかないからね」

優しい口調なのにノアのセリフは冷え切っている。このギャップ！ 萌えー！ どころではない。怖い！

けれどノアのこの反応はあの本を読んだ後では正解なのかもしれない。断罪イベントでアリスを最後まで執拗に追い詰めたのは、カインだったのだから。

（そう思うと何か腹立ってきた）

アリスはキツと隣のカインを睨みつけると、フンと鼻息を荒くした。

「おお？ なになにに、急に好戦的！ 流石ノアの妹。根性座ってんね」

楽しそうにアリスの髪を弄ろうとするので、その指先を噛む振りをしてやった。威嚇の仕方がまんま犬である。

「えーなにコレ！ いいなく俺もほしい」

何が良いかったのかカインのアリスに対する好感度が1上がった。

そこへカツカツと小気味の良い靴の音が聞こえてきた。ふと顔を上げると『花冠1』の悪役令嬢、キャロライン・オーグが真つすぐこちらに向かってくる。

思わず身構えたアリスとノアだったが、キャロラインは呆れたような顔をしながら近くまできてルイスの隣に腰かけようとして、ふと視線を上げた。

「ひっ!？」

「ひ？」

アリスを見た途端、不思議な単語を発してキャロラインは後ずさる。

「キャロ？ どうした？」

「キャロライン？」

あまりにも不審な動きに一同は思わず首を傾げてしまう。

アリスの知っているキャララインはいつでも毅然としていて堂々としていて、決してこんな動きをするような人ではない。ないのだが。

「キャ、キャラライン、どうしたんです？　ぐ、具合でも悪いのですか？」

ジリジリと後ずさるキャララインの肩を誰かが掴んだ。アランだ。

「ど、どうして……こんな所で会うなんて……」

意味深な言葉を残してキャララインはアランの手を振りほどくと、足早にその場を立ち去ってしまった。思わずノアと顔を見合わせたアリスはまだ事態が飲み込めずにいる。

「これはもしかしたら……」

「お待ちせしました。こちら、ホロホロ鳥のかば焼きコースでございます」

何かに気付いたようにポツリと呟いたノアの声は、昼食を持ってきたメイドによってかき消されてしまった。ついでに、アリスの頭の中も綺麗さっぱりかば焼きに上書きされてしまう。

「はい！　私！　私です！」

立ち上がって手を上げたアリスを見てカインは噴き出し、アランは驚いたように目を丸くしてルイスは目を細めて頷いている。

「元気なのはいい事だ。な、ノア」

「そうだね。ところでいい加減どこかに行ってくれない？　僕はアリスと二人で食事したいんだけど」

「お、お前、まだそんな事言うのか？　いいや、どこにも行かない。俺もここで食べる。そうだろう？　カイン、アラン」

「俺？　俺は別にどこでもいいよ」

「ぼ、僕もどこでも」

そう言つて席についたカインとアランだったが、そんな事にアリスは構わない。高燃費アリスが最優先すべきは攻略対象とのランチや挙動不審に去つて行つた悪役令嬢ではない。食事なのである！

「アリス、僕のを待たなくていいよ。はい、ちゃんとナプキン置いて」

「ありがとう、兄さま！　いったきまゝす！」

膝の上にナプキンを置かれて、いざ実食。

食事中のアリスは大変静かである。そして腐つても貴族。マナーはちゃんと叩き込まれているのだが、食べてる最中の表情は非常に煩いらしく、皆の視線が始終アリスに釘付けだった事は後からノアに聞いた。

アリスはとても丁寧に、しかしたつぷりと、トロトロに煮込まれ焼かれて柔らかくなったホロホロ鳥の骨までしっかりと味わう。

それを見ていたノアがギョつとした顔をしてアリスの頬を両手で抑えた。

「アリス？　今、骨食べた？　食べたよね？　駄目だよ骨は！　ぺっしなさい！　ぺっ！」

首を振ってイヤイヤするアリスと吐き出させようとするノア。しばらくその攻防を繰り返していたが、アリスがゴクンと喉を鳴らした事で戦いは終わった。

出された食材は骨までしゃぶりつく女、それがアリスである。しゃぶりつくすどころか食べてしまった訳だが。

「アリス、いつも言うけど骨とか添え付けの葉っぱとか、お皿に乗ってるの全部食べるのは止めようね。いくらマナーが出来ていても台無しだよ？」

ノアの言葉にアリスは憤慨した。ちよっぴりだけど。

「兄さま、出されたモノは全て食べる。それが命を頂くと言う事だよ！　残すだなんて私には絶対出来ないよ。それに、骨を食らわば皿までつて言うでしょ!?　本当なら私だつてお皿まで食べたいんだよ！」